



Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

No.
55

発行日：2013年9月30日

発行者：田中 真 / 編集者：小笠原 宏司 / レイアウト：鈴木 博文

SELDAAのあるべき姿とは

上智大学英語学科同窓会 会長 田中 真

青天の霹靂、とつぶやいて同窓会長を引き受けてから、今年は上智大学創立100周年という大きな節目に、気がつけば次の3年間もこの重責を引き受けることになりました。仕事と同じように、組織運営というのは100点満点はありません、では、何点なら合格点なのか、と自問自答しながらの3年間はあっという間でした。さて、これからの3年間は、できるだけ多くの卒業生および現役学生を巻き込む仕組みを考えてゆくことが、主要な課題となります。

卒業生の英語学科に対する思いは少なからずあるものの、体育会や同好会などと異なり、近い年代での「横のつながり」が主となり、同窓会としてあるべき「縦のつ

ながり」となるとどうしても違和感を感じるために、盛り上がりには欠けるでしょう。とはいえ、例えばサマー・ティーチング・プログラム（STP）は40年以上の歴史を持ち、参加した卒業生は相当な人数になります。そのような活動を一つの呼び水として、同窓会活動の「縦のつながり」を拡大できるのではないかと思います。

一方で「横のつながり」も必要であり、新執行体制では、前執行部よりも幅広い世代で常任委員会を構成し、各年代への働きかけをすすめます。

同窓会費未納という悩ましい問題がありますが、現有資産の目減りを恐れて、経費削減に徹するのではなく、会費納入への呼びかけを継続しつつ、できるだけ多くの会員の参画を促す企画への有効な使い道を模索してゆきます。

同窓会活動への会員の皆さんの積極的な参画およびご意見をお願いいたします。

5月26日（日）「オール英語学科の集い」 上智大学創立100周年、SELDAA設立30周年を記念して開催

上智大学のホームカミングディである5月26日（日）、「ASF（オールソフィアンの集い）」において、本年度もSELDAA主催の「オール英語学科の集い」を開催いたしました。

当日は、午前11時30分より1979年英語学科卒業で、現在、慶應義塾大学法学部の添谷芳秀教授を迎え、「最近の東アジア情勢と日本外交」というテーマで講演をいただきました。大学での一般講義の内容にとどまらず、外交理論とその背景に動く国民性、民族性の本質論等にも言及され、その極めて興味深い内容に、多数のOB・OGに加え、学生諸君にも大好評でした。

午後0時30分よりSTP（サマーティーチングプログラム）の現役学生による小学生を対象とした模擬授業が行われ



ました。創設者である吉田研作教授も参加され、「楽しく英語に触れる」ゲームや指導で、就学前児童から小学生高学年生までの予想を超える多数の子供たちの歓声で、会場は大いに盛り上がりしました。

「集いのひろば」では、軽食、アルコール類をご用意して、OB・OGのミニ同窓会の会場として利用いただきました。OB・OG、大学の教職員、そして現役大学生が集う空間として、世代を超えた「輪」が次々につくられ、思い出話、大学の将来のこと、自分の未来のことなどを笑顔で、そして熱心に語らう姿が見られました。

会の最後は、吉田研作先生、鈴木博文さんのギター演奏と歌で締めくくり、また、来年のこの集いでの再会を誓い合いました。



最近の東アジア情勢と日本外交

慶應義塾大学法学部教授 添谷 芳秀（1979年卒業）



2013年5月26日、英語学科同窓会主催「オール英語学科の集い」のイベントとして、1979年卒業の添谷芳秀さん（慶應義塾大学法学部教授・国際政治学者）の講演会「最近の東アジア情勢と日本外交」が行なわれました。この講演会では、隣国である中国・韓国との関係が微妙である昨今、中国や韓国が何を考えているのか、彼らがどういう前提条件を持ちながら対日外交を行ない東アジアに対応しているのか、一人の観察者としての理解を提示されました。また、中国や韓国が日本についてどう考えているかについても言及をされました。以下に講演の概要をまとめます。（文責：佐々木大介）

中国について

中国のナショナリズムは、アヘン戦争以来の屈辱感、最近の中国のめざましい成功からくる自信やプライド、これら2つの重要な要因の組み合わせであると理解していますが、これは国際社会から見ればかなり厄介な問題です。彼らの歴史教育がおかしいなどいくら文句をいったところで現実是不変な訳であり、そういった中国を相手にしていかなければなりません。

ただ現在の中国は、共産党政権の批判、台湾やチベットの問題、日本の歴史問題といった「タブー領域」を除いてはかなり多面的になってきて自由に議論もできるようになっており、懸案の尖閣問題については、中国の民主化しか出口がないのではないかと。今は難しいとしても、いずれ中国人の多面的な認識の一種として埋め込まれて

いくようになっていけば、それが事実上の解決だと思います。

韓国について

日韓問題が難しい問題となっていくプロセスは、韓国の民主化が始まったプロセスと見事に一致しています。これは竹島問題や従軍慰安婦問題も同様で、その根っこには韓国における反日の部分が強いといえるでしょう。公の言説の中で日本というものは見事なほどに登場してこなかったものの、彼らの頭の中には日本が非常に強く意識されています。

中国との関係と韓国との関係、どちらが難しいかというのはよく議論になるのですが、私個人の感覚としては、韓国はすでに民主化していることもあり、韓国の方がつき合いやすいなという感覚を持っています。民主化の最大の長所は多元主義だと思っています。いろんな多元的な意見が自由に表明できると、政治の競争の場でも多元的なファクターの衝突が起きる。多元主義のいいところはどこかで均衡点があることで、そこに意味があるからこそ、多元主義・民主主義というのは、さまざまな結果を与えつつも、我々のこれまでの人類の歴史の中での唯一の選択肢ということになる訳です。

日本の外交をどのように考えたらいいのか

彼らからいわせると、日本の歴史認識が間違っているからなおせばいい、日本が正しい歴史認識を持てばいいといういい方も、日本が彼らに対して、彼らの対日観や対日理解は間違っているといったりすることも、すべきではないことを互いにやっているような状況があるので、悪循環が生まれるのは必然だと思います。高い内閣支持率（実際には、昨年末に大勝した自民党の得票率は、2009年に自民党が大敗したときの投票率よりも下がっているのですが）が日本社会の右傾化、安倍首相の歴史観を支持しているという見方は中国や韓国はすでに常識的な理解となっています。しかし、そのときの私のいい方は、安倍政権とはいっても日本の歴代政府の中の“one of them”（民主主義の中でいろいろな内閣ができていくということ）であって、イラク問題での河野談話に対して、もし安倍さんが新しいものを出したとしても、河野



談話の効力をそれでもって否定するものではないと私は解釈しており、日本にも民主主義の中でいろんな内閣ができていて、まさに安倍内閣は“one of them”なんだという前提での説明が大事なのではないかと思います。それが民主主義であり、そういうふうに思えないとすると、相手の民主主義観の欠陥ということになるのだろうと、内心は思います。

日本社会の右傾化の議論については、中国や韓国だけではなく、欧米にもあるというのが日本にとってはまた別の意味で大変な問題です。例えば、アメリカの *The New York Times* 紙はそういう路線ですし、イギリスの *The Economist* 誌も基本的にはそういうスタンスです。また、「ルサンチマン」（弱者が強者に対してさまざまな怨恨の情から反発すること）から出てくる保守的な言説が戦略的にはマイナスだという構図は明々白々だと思うのですが、怨恨の情や被害者意識から物事を組み立てて考える人たちがわりと政治家には多いというのが、日本の政治の一つの大きな問題だのように思っています。これは戦争前の歴史の理解の問題ではなく戦後史の理解であって、戦後史をどう理解するかが重要なのです。

結論

日米安保条約や憲法がなぜ変わっていないのかは大きな理由があり、今後当分は変わらないと思います。集団的自衛権は当然の権利ですが、今の改憲論の中には改憲した後のことを誰も議論していないんです。問題をつらつらいいながら前に進もうとしているのが現状で、実際に改憲をした後、集団的自衛権を持ってアメリカの戦争を戦おうという条件が整った日本が見えてきたときには、私はほとんどの日本人はノーだと思います。実際、96条の改定は反対の方が多いんですね。非常に具体的なテーマですから、それを変えたらどうなるかという姿が見えてきた訳です。そうすると、日本人はまだそこまで心の準備はできていない。ルサンチマンだけで重要アジェンダが提起されているのが、今の政治の分かりにくさなんだろうと思います。

この分かりにくさは我々にとっても分かりにくい訳で、彼らにとってはもっとも分かりにくい訳です。こういう不幸な状況が、今我が国の外交と近隣諸国の間には起きてしまっています。その現状から脱するために何をしたらいいかを、我々が今後考えていくべき問題で、私自身もそういう問題意識でいろんなことを議論しているつもりですが、残念ながら、問題認識自体が共有されていないということを感じてしまいますので、そこで少し大きな壁を感じているところです。



英語能力判定試験の動向

上智大学言語教育研究センター
教授・センター長 吉田 研作

今年に入ってから、自民党や政府が英語教育について色々提案をしています。中でも、大学入試センターのセンター試験廃止についての提案は、高校にとっても大学にとっても大きな問題で、そんなことが本当に可能なのかどうか、疑問視する人が大勢います。英語については、既にセンター試験以外にもいわゆる英語能力判定試験（その他の外国語にも）はいくつも存在するので、センター試験が廃止されてもそれにかわるテストを利用することは可能でしょうが、他の教科の場合はどうなのか、はなはだ心もとない状況です。

上智大学では、日本実用英語検定協会と4年前からTEAP (Test of English for Academic Purposes) の開発を進めてきていますが、2015年度一般入試の一部に「全学入試」を設け、どの学部学科を受験するにも、英語はTEAPの結果で決まる、という方法が取られることになりました。TEAPは、2014年度から、年に3回、全国7箇所を受験でき、その中で、受験したい学科が指定したTEAPのスコア以上が取れれば、それを大学に提出し、入試当日には、英語の試験は免除されることになります。

実は、私たちが作ってきたTEAPは、TOEFLなどと共に、今後センター試験が廃止された場合、英語の大学入学資格試験として用いられる可能性が非常に高いのです。そして、文科省は、TEAPに大きな期待を示してくれています。それだけ、私たちTEAPの開発に携わってきた者にとっては、大きな責任を感じているのです。更に、4技能を統合的に教えることを指導している文科省にしてみると、4技能をターゲットにした総合的な英語能力判定試験であるTEAPを後押ししてくれています。

ただ、入学段階で良いテストが使われたとしても、大学に入学後、その英語力を生かせる場がなければ意味がありません。その点に関しても、上智は、CLIL (Content and Language Integrated Learning) というアプローチを英語教育の根幹に据えることにより、入学時にテストしたアカデミック英語能力を使って学問内容を英語で学ぶことができるように英語教育改革を行っています。

2014年度以降の上智大学の外国語教育の改革にご期待下さい。私が上智に残っている間に、TEAPもCLILも軌道に乗せたいと思っていますので、応援のほど、よろしくお願いします。



SELDAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。SELDAホームページをご参照の上、会費の納入をお願いいたします。

**会費納入
のお願い**

キーワードは「バランス」

森部 高史 (2000年卒業)

ロルフィン・オフィスKukuna Body主宰

英語学科の先生、卒業生の皆さんいかがお過ごしでしょうか。第44号で登場させて頂いた時は、University of Arkansasの大学院でスポーツ現場で選手の怪我の予防、ケアやリハビリを行うアスレチックトレーナー(ATC)の勉強をしていました。あれから早い物で7年の歳月が流れました。

大学院を修了後は、NFLやMLBといったプロチームで経験を積み、カリフォルニアとニューヨーク州北部の大学でATCとして勤務、その後、英語学科在籍時に交換留学でお世話になり、ATC人生のスタート地点となったハワイ大学に呼び戻され、2012年5月に7年のアメリカ生活にピリオドを打ち、日本に帰国致しました。

現在、ATCとしてはU22男子ラグロス日本代表チームを見えています。日本代表というあまり縁がないように思われる方も多いかも知れませんが、22歳以下のチームなので、彼らは上智のキャンパスを歩く学生達と同世代です。しかしながら、そこで「国の名前」を背負う事で



生まれる責任感や使命感というものがあり、「自分」という枠から一歩でた時、人は成長出来るのだと彼らを見ていて思います。

僕自身は選手としては到達できなかった場所でしたので、一回り程離れた若者が懸命に駆け回り、外国人を相手に戦う姿は誇らしくもあり、逞しさを覚えます。同時に若さ故に無茶をしてしまう時もあるので、日頃から自分の「身体の声聞く」習慣を付けるように促し、指導を行っています。

ATCとしての活動以外では、西麻布にオフィスを構え、ロルフィンという10回の施術を通して身体全体を整えるボディワークを行っています。対象者はアスリートに限らず、老若男女全ての方。自分の身体で快適な生活を送れるようになるお手伝いです。オフィスに来てくださる方々と時間を過ごしていると、皆さん様々な事に対処して、一生懸命バランスをとろうとしながら日々の生活を行っているのだな、そして人の身体というのは、その人の歴史そのものである、とも感じます。

身体の不調は嫌なもので、痛みが続くのは辛いものです。でもそれは身体が送ってくれているサインなのです。「今までの身体の使い方は自分の体にはフィットしていないよ。違うやり方が必要だよ」、そんなメッセージをどう捉えるか、肩が重いな、嫌だな」と思っていると不思議と身体は本当に動かなくなってしまうものです。現状を受け入れ、どうしたらそれが変わって行くかを具体的に行動に移して行く事で見える景色が変わってきます。

また、現代社会では心の病に悩む方も少なくありません。身体と心は密接に繋がっています。身体を整える事で心が整う事もあり、その逆も然りです。実際にクライアントの方が10回のシリーズセッション後半に入ってくると明るくなったり、ポジティブになったりというケースを目の当たりにすると一層その繋がりを強く感じます。

物事を上手く進めるキーワードは「バランス」だと思います。バランスは「とる」ものでなく「とれている」もの、バランスをとろうとしている時は既に何かが崩れているのかもしれない。

この“Doing”が“Being”になった時、自分という軸を持ちながら、身体も心も解放された伸びやかなライフスタイルが体現されるのだと思います。

それはこれをやればできる、というものではなく、日常を少しずつ大切にしていくことで、振り返るとその場所にいつの間にかいる、というものなのではないでしょうか。

最後に自分の身体のケアをされたのはいつですか？世界に一つしか無い自分の身体、しっかりと感じて大切にしてください。

英語学科を出て、こういう分野にいる人は珍しいのかとも思います。何かお力になれることがあればご連絡を頂ければと思います。それでは今日も伸びやかな一日を。

メール： info@kukunabody.com

ホームページ： www.kukunabody.com

SELDA

会費納入
のお願い

SELDAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。SELDAホームページをご参照の上、会費の納入をお願いいたします。

役員のつづき

中村 寛 (1984年卒業・副会長兼事務局長)

「属人的」なつながりと「組織的」な運営。友の近況把握と個人情報保護。FB等SNS利用と公式HP上更新。各々仕事感覚が抜けきれない中、諸々運営上のお作法問題はあっても、ドライブは「母校(の友人)懐かしさ」。「集まって飲む機会をつくること」。同窓会の肝は昔も今もこれからも、やっぱりコレでしょ!

笹沼 雅由子 (1999年卒業・副会長)

3年前、わけもわからず勢いでお引き受けしたSELDAA常任委員。田中会長率いるSELDAAの二期目では、なぜか副会長を仰せつかりました。Noと言えない性格を恨むのではなく、せっかく大好きな母校にいただいた機会を楽しみながら、英語学科卒業生の皆さんにとって意義のあるSELDAAになるよう微力を尽くしたいと思います。

鈴木 博文 (1974年卒業・常任委員)

今年は上智大学創立100周年を記念する年だが、同時にSELDAAは設立30周年を迎える。1983年の設立時には副会長兼事務局長として関わり、SELDAA30年の歩みに寄り添ってきた。しかし上智大学全卒業生の約7%を擁するSELDAA会員すべてをまとめていくことは、もはや不可能になりつつある。

小泉 究 (1975年卒業・常任委員)

ソフィア会との懸け橋という立場で常任委員としてご指名戴き、はや二期目に突入。あっという間の3年だった。我々75年卒は、2000年に銀祝の式典があり、今年は金祝への25年の折り返しを迎えている。9月6日(金)、71年入学組の17名を集めてミニ同期会を開催した。さて金祝までみんな頑張ろう!

小笠原 宏司 (1979年卒業・常任委員)

仕事柄、子供たちの未来に心を馳せることも多い。しかし、自分が学んだ学科の将来の姿を覗く機会など30年近くなかった。変化? 進化? それとも退化? しかし、そこには私が青春期を生きた証がある。時折、思い出してみる。そして、あの時の場所に友と佇んでみる。ただ、それだけで、いい。



SELDAAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。SELDAAホームページをご参照の上、会費の納入をお願いいたします。

漆原 朗子 (1984年卒業・常任委員)

SELDAA創成期の1984-88年大学院におり、事務局を務めさせて頂きました。その後米留学を経て福岡在住早20年、今年度より副学長という火中の栗を拾われましたが、その分東京での会議も一層増えます。実家も大学生の息子も東京なので、微力ながらお手伝いしたく、よろしくお願い致します。

平岩 典子 (1985年卒業・常任委員)

卒業してしばらく母校から遠ざかっていましたが、2010年の銀祝、昨年4月の丹野先生を囲む同期会、今年2月のSTP関係者の会、ピタウ先生を囲む会等ですっかりホームに戻ってきた感じがしています。長年会計事務所にいましたので、何かお役に立てれば幸いです。よろしくお願い致します。

佐々木 大介 (1993年卒業・常任委員)

“Men and Women for Others, with Others” という上智の教育理念をご存知かと思います。外英で5年、修士で4年、計9年も四谷にいたせいか、何か貢献できることがあるのではないかと思います。この度SELDAAのお手伝いをさせていただくことになりました。至らぬ点はあるかと存じますが、よろしくお願い致します。

熊坂 おりほ (2003年卒業・常任委員)

卒業してちょうど10年になります。STP40周年イベントでまたまお声がけ頂いたことをきっかけに、今年は常任委員にまでご指名頂きました。気づくと母校に足を運ぶ機会も増え、なんだか母校が呼び戻してくれているようでとても不思議な気がしています。今期は同世代を更に呼び込めるよう邁進して参ります。

鶴岡 容子 (1977年卒業・会計監査員)

数十年ぶりに会った田中会長が同級生というご縁で参加したのが3年前。最初は会計担当。今回は会計監査。良くわかりませんが、もう一人の会計監査の藤代様のご専門と伺い、ついて参ります! どんどん老化していく自分に刺激を与えていただいくいい機会かと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

藤代 芳正 (1978年卒業・会計監査員)

会計監査員として二期目を引き受けさせていただくことになりました。継続して「true and fair view」をもって務めさせていただきます。SELDAA以外に所属していた運動部のOBOG会の幹事としており、四谷に足を運ぶ機会が増えました。毎回里帰りしているような気分です。よろしくお願い致します。

【編集後記】

まず、編集人の力量不足で、発行が遅れ、会員の皆様にお詫びを申し上げます。さて、SELDAAの新体制が始まった。新たな常任委員も増えた。会員の「お・も・て・な・し」を真剣に考える委員、会員からの感動の「倍返し」が届くのを期待する委員。新鮮、柔軟、そして進取。同窓会に新しい風を吹きこむのは、いつ?・・・「今でしょ」

外国語学部英語学科は、歴史的な転換期を迎えています。我々のもうひとつの故郷が、変わろうとしています。同窓会が開催するイベントに参加いただき、あるいは関心をもっていただき、見守ろうではありませんか。

Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

発行：上智大学英語学科同窓会 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室 気付
Tel. 03-3238-3719 Fax. 03-3238-3910 URL. <http://www.seldaa.net>

No.

55